

# 新しい文字図形表現の標準

(株)生活構造研究所 鈴木優一

カナダのテリドンが、最近急速に注目を浴びるようになってきた。数年前まではほとんど知られていなかったが、その高い図形表現力、通信の容易さ、パフォーマンスの良さなどによって、ここ一年で日本でも市民権をもつようになってきた。

テリドンは、カナダの通信省のもとで、一九七八年からビデオテキストの最新方式(アルファ・ジオメトリック方式)を取り入れてスタートした。当時はこの方式を実現するのに端末がコスト高になるといわれていたが、最近のマイクロエレクトロニクスの進歩と低価格化でコストは問題でなくなった。

テリドンは日進月歩のエレクトロニクスの世界で、個々のハードウェアに依存しない自立した規約として構成されたところに、その先進性がある。従来のシステムの多くは、ハードウェアに依存しすぎていたために、それがいかに良いものであっても、急速なハードウェアの進歩に対応できなくなってしまう。

情報の蓄積や伝達を考えるとき、一過性のシステムに多大な労力を費してこれを託することはあまりにもばからしい。

しかし今までのコンピューター・システムや情報処理の世界は、このことの繰り返しであった。営々として作ってきたシステムが、ハードの進化で捨て去られてしまってきた。ソフトウェアはハードから独立しなければならぬ。テリドンは、この思想のもとに考案された情報伝達のシステムである。この方式によって作成される情報は、将来にわたって互換性が保たれる。

文字については、情報交換のコードとして英数字と若干の記号に関する標準が、アメリカでASCIIコードとして定められ、これによって情報交換がハードウェアと独立してできるようになった。このコード体系が全世界の標準として採用されたからこそ、様々なデータベースがハードウェアから独立して蓄積できるようになってきたのである。

テリドンは人間の情報伝達のもうひとつの重要な要素である視覚情報、つまり図形についても、その表現方法に一定の規約を設け、コード化した情報交換・通信の標準として提案されたものである。昨年アメリカがこの方式を受け入れ、CSA(カナダ標準局)とANSI(アメリカ

標準局)の共同でNAPLPS(北米プレゼンテーション規約)としてこれを採用した。この意義は非常に大きい。マイクロコンピューターが普及した現在、この規約を解釈し表示するソフトウェアによって、ビジュアルな情報の交換・通信がネットワークによって全世界的な広がりをもつことが可能となったからである。

テリドンは、ホームショッピングやホームバンキングの媒体として多く語られてきた。これらは確かにテリドンの応用の分野ではあるが、コンピューターの扱う情報交換のコードの拡大を見ると、様々な情報処理の分野と結合して、無限の応用が拓けてくるのではなからうか。



PDIコマンドで簡単に図形が描ける。

テリドンのコード体系は簡潔にまとめられている。多様な表現のため、英文字、補助文字、PDI(図形描画指令)、モザイク、マクロ(同一パターンの登録)、DRCS(外字登録)が用意され、これ

らの選択により文字や図形の表現を行う。すべてのコードはバイト単位にまとめられ、従来の文字コードの拡張となっている。テリドンは日本語はサポートしていないが、同じ考え方で漢字・カナを容易に付加することができる。

図形表現はPDIコマンドで実行される。5つの基本要素(点、線、長方形、円または円弧、多角形)で図形が表現される。各図形は色、線種、ぬりつぶしパターン、点滅などで制御され、多様な表現が可能となる。図形の位置は規格化された単位スクリーンで定義され、物理的なハード依存性を排除している。

文字表示も豊かな表現を可能にするコマンドがあり、横書き、縦書き、字の大きさ、回転など多様にコントロールできる。

テリドンの端末はこれらのコードを通信回線(電話など)から受け、各コマンドを解釈し、意味づけしてグラフィック画面に表示する。この端末の機能は、パーソナルコンピューター上のソフトウェアで実現できる。日本で百万台とも言われるパーソナルコンピューターは、潜在的にテリドンの端末の可能性をもち、その意味でテリドンは日本で広範に普及できるようになろう。

今年にはニューメディア元年といわれ、新しいメディアの多様な展開が始まろうとしている。カナダのテリドンも、日本での利用が開始され、色々な応用が試されることとなろう。日本やアメリカ、カナダとのテリドンによる通信も現実のものとなってきた。